

## 2 道徳的価値の理解を目指した発問づくり

假屋園昭彦（鹿児島大学教育学部心理学科 教授）

### 1 道徳的価値の理解を目指した発問とは

道徳は小学校が平成 30 年，中学校が平成 31 年より「特別の教科 道徳」という新しい位置づけになる。この方向に沿って、「特別の教科 道徳」としての改正学習指導要領および改正学習指導要領解説が，それぞれ平成 27 年 3 月，同年 7 月に示された。

特別の教科としての新しい方向性は，第一に，道徳科の目標が道徳的価値の理解を重視していることである。第二に，考える道徳，議論する道徳という学習活動が提案されていることである。

本論では上記の動向を受け，道徳的価値を理解するための発問づくりについて考えてみる。道徳的価値を理解するための発問とは，①道徳的価値の意味と機能を浮き彫りにできる発問，②道徳の時間の中だけで完結する発問ではなく，道徳の時間後の日常生活の中で，児童生徒が自分，人間，社会を捉える際の視点として自問自答しうる発問，である。

たとえば授業で「勤勉，努力，忍耐」の内容項目を扱うとしよう。この内容項目では，教師が授業の最後に「努力と忍耐が大切です」といったまとめ方をしてしまうことが多い。このまとめ方は「道徳的価値は大切です」と訴えているにすぎない。この水準までは児童生徒もわかっている。その結果，児童生徒が「道徳はわかりきったことを…」といった感想をもつに至る。これでは道徳的価値を扱ったことにならない。

日常生活で私達が「勤勉，努力，忍耐」という価値を実行しようとする時，実際にどんな問題と直面することになるのか，という部分を発問として扱う必要がある。特定の道徳的価値を実行しようとする時に私達が直面する問題こそ，価値の意味と機能を浮かび上がらせ，常に抱え続けて自問自答していかなければならない問いなのである。

以下にこうした問題が含む論理を紹介しよう。これらの論理から生じる発問に思考をめぐらす活動をとおして，考える道徳，議論する道徳が実現できるのではないだろうか。

### 2 道徳的価値の普遍化可能性の原理

道徳的価値の普遍化可能性の原理とは，特定の価値を実行するか否かの基準は何か，という論理である。特定の価値をどこまで広げることができるかを問うので普遍化可能性という文言を使っている。倫理学では有名な理論である。

この論理に基づいて「生命尊重」を考えてみよう。この論理からは「生命を尊重しなければならない対象はどこまでになるのか，そしてその線引きの基準は何になるのか」という発問が生まれる。例えば，哺乳動物の殺傷については「イルカを殺してはならない」という見解がある。「ブタやニワトリは殺傷して食べてもよいが，イルカは殺傷してはならない」という見解から，私達は何を生命尊重の基準としているのかを考えるのである。この問いから，私達が生命をどのように捉えているのかが浮き彫りになる。

次にこの論理で「思いやり・親切」を考えてみよう。この論理からは「親切にする対象をどこまで

広げるのか」という発問が生まれる。自分に近い順に考えてみよう。家族や仲間には親切にするだろう。しかし自分が嫌っている人や自分と仲が悪い人、全くの他人には親切にできるだろうか。

もし、家族や仲間といった自分と近い人には親切にして、自分が嫌っている人や自分と仲が悪い人には親切にする必要がないとしたら、それは親切と呼ぶのだろうか。この問いかけから親切の意味と価値を考えることができる。

### 3 対称性の原理

対称性とは、「自分にあてはまることは他人にもあてはまる」、「自分にあてはめていることは他人にもあてはめてよい」という意味である。この論理は、「自分が相手にしてあげたことを相手も自分にすべきである」という考え方につながる。私も相手もお互い対等な権利をもつという意味である。

この論理を道徳にあてはめると、「私はあなたに親切にしてあげたのだから、あなたも私に親切にすべきだ」という考えが生まれる。この論理は道徳的行為にあてはまるのだろうか。この問いかけから考えると、道徳的価値が価値である理由が浮かび上がってくる。

### 4 功利主義と義務論

功利主義とは成果主義の考え方で、特定の行為は、自分や他者、共同体によい結果をもたらしてはじめて意味があるという論理である。「自分がすっきりした、周囲が喜んでくれた」という考え方は功利主義になる。この論理からは「よかれと思って実行しても、よい結果をもたらさなかった場合は意味がない」、あるいは「成功しそうにない場合は、やらない方がよい」という考えが生まれる。

一方、義務論は、「結果にかかわらず、その状況で自分がやらねばならない行為をやったこと自体に意味がある」という論理である。かりに失敗に終わっても、あるいは、成功しそうになくても、自分の義務としての使命感に基づく行為には意味がある、と考える。

日常生活を振り返ると、「頑張ったけれどうまくいかなかった。果たして自分の行為には意味があったのだろうか。」あるいは「成功しそうになれば、やらなくてもいいのだろうか。」といった問いをもつ機会は多い。

功利主義と義務論という論理を知っておくことで、日常生活での自分の経験や生き方を意味づけることができる。

### 5 発問づくりにあたって

本論では、道徳的価値を実行しようとする時に、実際に私達が直面する問題が含む論理のいくつかを紹介した。直面する問題とは、実行をためらわせたり、迷わせたりする問題であり、実行後の自分の行為に疑問を生じさせる問題である。こうした問題の中に、道徳的価値の意味と機能が潜んでいる。「どうしようかな?」、「本当にこれでよかったのかな?」という疑問を「何に迷っているのか?」、「どこに領けないのか?」という発問の形で追求することで、道徳的価値を理解するための発問づくりが可能になるのではないか。